



一緒に現地を訪れるいとこたちと面会を心待ちにする宮里強さん(中央)
=沖縄県南風原町

高齢化進むフィリピン残留日系2世

「ずっと会いたかった」

太平洋戦争前にフィリピンに渡った日本人と現地女性との間に生まれた残留日系2世。日本国籍取得が進む一方、身元の証明が難しかったため救済されず、日本の親族と会えない人が多い。そうした中、沖縄県の男性が現地を訪れ、親族の2世と会う。支援団体は「日本側から行くのは初のケースで、後に続く人が出てほしい」と期待する。

沖繩の宮里さん 祖父の人生たどり面会へ

存在 ■

「ずっと会いたかった」と思っていた。5月中旬にいとこと現地を訪れる沖縄県南城市の宮里強さん(54)は、大きな目を輝かせた。面会するのは、祖父の源一さんが戦前フィリピンに出稼ぎに行き、現地で結婚した女性との間に生まれたコンチータ・バシランさん(73)ら。

源一さんは戦争に巻き込まれ1945年にミンダナオ島で死亡したが、宮里さんは父親から

コンチータさんらの存在を聞かされていた。

「父は仕送りもなく音信不通になってしまった祖父を恨む気持ちもあったと思う。でも、どうい生活をして、どうやって死んでいったのか知りたかったはずだ」。亡くなった父親に代わり源一さんの人生をたどることが、親孝行と思うようになった。

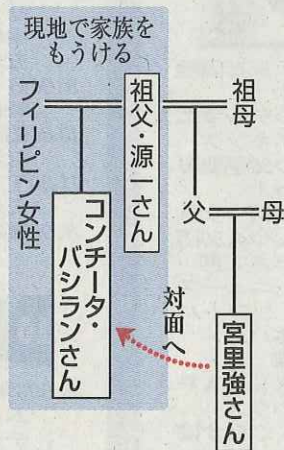
国籍 ■

NPO法人「フィリピン日系人リーガルサポートセンター」(東京)によると、終戦までに約3万人の日本人がフィリピンに移住し、多くの人が家族をもつた。戦死したり、戦後に強制送還されたりし、コンチータさんのように取り残された2世は約3千人に上る。

2世は反日感情による差別を受けながらひっそりと暮らしてきたが、80年代に日系人会の活動が活発になると、自分のルーツを探り、日本国籍を求める人が増えた。

2006年、東京家裁は2世の姉妹に、日本国籍を認める決

対面する2人の関係



定を出し、これまで120人が取得。日本人としてのアイデンティティを持つことに加え、子孫が日本で働く定住ビザを取得できる経済的なメリットがあることが背景にある。

課題 ■

だが、親が日本人だと証明する証拠書類が残っていないことから、手続きが難航する例は多い。日本の親族が特定されて協力が得られればスムーズに進むが、対面さえ難しいのが実態だ。センターによると、日本側では突然「親族だ」と言われることに抵抗がある。宮里さんとコンチータさんの場合も、宮里さんの親族には当初、面会に戸惑う声もあった。

日本国籍の取得を裁判所に申し立てている2世の平均年齢は74歳を超え、高齢化も課題だ。センターの担当者は「2世は戦争によってもたらされた犠牲者。できる限り救済していかねければならないが、残された時間はいくつか」と危機感を募らせている。